

The Estimation of the New Keynesian Phillips Curve in Japan and Its Implication for the Inflation Responses to a Monetary Policy Shock

神戸大学 柴本 昌彦

ニューケンジアンフィリップスカーブ(NKPC)は、理論研究において、近年の多くのマクロモデルの中でも標準ツールとして普及する傾向にある。本研究では、様々な特定化の下でのNKPCを推定することによって、日本のNKPCの実証的な当てはまりの良さを評価する。いくつかの実証結果から、完全にフォワードルッキングなNKPCに金融政策のコストチャネルの存在を意味する名目金利の導入を行うことによって、日本のインフレ動学の説明力が有意に改善することがわかった。金融政策のコストチャネルの存在に加えて、実質ユニットレーバークストを使うことが、NKPCを推定する際、重要な要素であることがわかった。これらの実証結果の含意として、ニューケンジアンフレームワークにおいて、金融政策のコストチャネルの存在と実質ユニットレーバークストの緩やかな調整過程の両方を考慮することにより、金融政策ショックがインフレへ波及するまでに長いタイムラグを伴うという定型的事実を説明することができる。